

## 論文の内容の要旨

論文題目     ファシズム期イタリアの政治システムの変容  
                  ——ラス支配の終焉とドゥーチェ独裁の成立——  
氏名           小 山 吉 亮

本稿の目的は「不完全な全体主義」と位置づけられてきたファシズム期イタリアの統治構造とその変容過程について検討し、その特質を明らかにすることである。具体的には、1920年代末から30年代前半に生じたその変容の過程について、ムッソリーニとサブリーダーの政治的資源と戦略、そしてその変遷に着目して分析した。

第1章ではファシズム期イタリア史の研究状況を概観した。ファシズム期イタリア研究では、従来の通説だった「個人独裁」説に代わって、全体主義が「そこに向かって進化していくためのパターン」であり、その定義上、不完全・未完成であるとする「全体主義」説が有力になっている。そして、いずれの説においても20年代末から30年代前半の時期が重要な転換期だとされているが、この時期は研究の空白期でもある。

第2章ではムッソリーニとサブリーダーの構想・政治的資源・戦略について分析した。第2章第1節では、ムッソリーニとサブリーダーとの相互作用の場を「頂上政治」と名付け、それがファシスト党上層部と政府上層部との媒介構造であることを示した。そして、政府機構、ファシスト党機構、教会系列機構による「普通の人びと」への浸透の試みが「頂上政治」の影響を受けていたことを明らかにした。

第2章第2節ではムッソリーニの構想を取り上げた。彼はいずれ死滅する旧世代（「頑固者の世代」）のファシスト化には期待せず、新世代の成長を待つ姿勢を鮮明にしていた。ムッソリーニは「ファシスト革命」の成功のためには、青年の成長まで政権が「持ちこたえる」ことが不可欠だと考え、旧世代との衝突を避けたのである。本稿では全体主義体制を「被支配集団を支配集団に同化することを目指して、多様性の消滅を公然と掲げる政治体制」と定義したが、ムッソリーニの構想はこの定義に合致する。長期的な全体主義化のために政権の存続を優先し、短期的な全体主義化を断念したそのあり方は「待ち続ける全体主義」と呼ぶことができる。新世代には全体主義的、旧世代には権威主義的に対応する

姿勢は、危険性のない集団を放置する「選択的全体主義」と同じ論理に支えられていた。

第2章第3節ではムッソリーニの政治的資源と戦略について論じた。ムッソリーニは政府首長としては国王と大評議会に対抗できず、党の長ドゥーチェとしては党を統率できていなかった。そこでムッソリーニは自らの威信と政府首長の権限を強化し、国王と大評議会、そして党に対する優位を確立しようと企てた。彼は国家至上主義における「国家」を政府と同視することによって、政府首長独裁の法制化を推し進めた。

第2章第4節ではサブリーダーを取り上げた。地方で自律的な領域的基盤を築いたサブリーダー（ラス）は、ムッソリーニを筆頭とするヒエラルキーに組み込まれた「高官」に転身を遂げた。彼らは領域的基盤に代わる資源として威信に着目し、公的地位への専門特化によって威信を高める道を選んだ。その結果、ムッソリーニに対抗できるほどの威信を持たない「普通の」サブリーダーたちは激しい抗争に突入した。他方、ムッソリーニに匹敵するカリスマ的威信を持つサブリーダーは、その威信を高めることによってムッソリーニにいつそう警戒されることになる。

第3章ではサブリーダーの政治的資源の変化を、中央・地方関係の変化に着目しながら跡づけた。具体的には、彼らの当初の政治的資源である領域的支配（ラス支配）に目を向け、ボローニャ県におけるアルピナーティのラス支配の検討を通じてラス支配の特質とその限界を明らかにした。複数のラスの競合に直面していたアルピナーティは中央の介入に頼りながら自らのラス支配を確立しており、経済情勢の悪化によって中央への依存をいつそう深めることになった。ラス支配は中央と地方の棲み分けに立脚した支配であり、中央の自律性が低く地方と連携せざるをえないパトロン型仲介の状況に対応していた。やがて集権化が進み中央の自律性が高まると、ラス支配は存立の基盤を失うことになる。「ラスから『高官』へ」と呼ばれる現象は、このような変化の産物だったのである。

第4章以降では主に中央の政治過程について検討した。1929年9月の内閣改造ではアルピナーティを含む多くのサブリーダーが登用された。そこで第4章ではサブリーダーたちの構想を確認した上で、この改造に至る経緯について、国制／経済制度改革、および教皇庁との「和解」を中心に論じた。そして、28年の大評議会法が妥協の結果として大評議会の肥大をもたらしたこと、教皇庁との「和解」によってムッソリーニの威信が頂点に達したこと、その威信を維持するためにムッソリーニが「和解」後に「綱渡り」を余儀なくされたこと、国制／経済制度改革をめぐるサブリーダーたちの関係の変化が内閣改造を引き起こしたことを明らかにした。

第5章では、29年の大評議会法改正で政府首長独裁が確立したことを確認した上で、青年／教育問題が重要課題として浮上した経緯を描いた。30年後半以降、青年／教育問題の争点化、経済情勢の悪化、「黒シャツ」の活性化などによって「国家・教会関係」は危機に陥った。ムッソリーニは「頂上政治」の行き詰まりと「国家・教会関係」の危機を打開するために、あえて限定的危機を引き起こして治安機関を動員し、事態の主導権を握る道を選んだのである。「和解」で高まったムッソリーニの威信は「親カトリック」の論理に支えられていたが、「黒シャツ」の間では「反カトリック」の論理が強まっていた。党の統率にも騒乱の阻止にも失敗し、その上「和解」も破綻することになれば、ムッソリーニの威信は地に墜ちかねない。ムッソリーニは、党が独走したという印象を与えないようにしながら党の独走を阻止するしかなかったのであり、限定的危機の戦略はそのための方策だった。結局、彼は自らの威信によって行動を制約されたのである。こうして政府首長独裁は早くも限界に直面し、ムッソリーニは業績による威信ではなく、人格・属性によるカリスマ的威信への転換を余儀なくされた。そのためには政府首長独裁の法制化だけでは不十分であり、党の長「ドゥーチェ」の威信を絶対的なものにすることが不可欠だった。

第6章ではサブリーダーたちの抗争について分析した。31年12月にファシスト党書記に就任したスタラーチェは前任者ジュリアーティの純化路線から大きく転換し、一般黨員の入党推進に舵を切った。こうして党が変貌を遂げるなかで、威信をめぐる「高官」たちの抗争と失脚が相次ぐことになる。この過程で、カリスマ的威信を持たない「普通の」サブリーダーは闘いを有利に進めるためにドゥーチェ称揚に傾斜した。しかし、ムッソリーニが自らに対抗しうる強大なサブリーダーを排除したという通説的見解とは逆に、彼は反抗的な有力者を排除しなかった。それどころか、事態は、「黒シャツ」の間でカリスマ的威信を誇るサブリーダーたちに有利に展開したのである。

その理由については終章第1節で論じた。絶対的威信の確立を目指したムッソリーニは政府首長独裁から、党の長「ドゥーチェ」を威信の源泉とするドゥーチェ独裁へと舵を切った。こうしてムッソリーニは党の中核である「黒シャツ」の動向に配慮せざるをえなくなり、彼は「黒シャツ」の間で威信を誇るサブリーダーとの衝突を回避することになったのである。サブリーダーの抗争の激化とムッソリーニの方針転換が重なった結果、ムッソリーニからの自立を試みたサブリーダーは彼への依存を却って深め、サブリーダーの独走を抑えようとしたムッソリーニは「黒シャツ」を基盤とするサブリーダーとの

妥協に追い込まれた。こうしてサブリーダーの排除がいつそう激化した。サブリーダーの排除は、ムッソリーニが絶対的なカリスマ的威信の確立を目指していたが、それが未完成だった時期の過渡期的な現象だったのである。

終章第2節ではムッソリーニの威信が国制において果たした役割について検討した。ファシズム期の国制は「国王・政府首長・大評議会の三元制」だった。「革命」の成功のために政権存続を優先する発想は、国王、政府首長、大評議会の3つの機関を「三すくみ」の関係に再編した国制を生み出した。そのなかで政府首長が大評議会を従え、大権を持つ国王を抑えて主導権を握る仕組みは、ムッソリーニが大評議会を手中に収めていることを前提としていた。彼は属性に基づくカリスマ的威信の確立でこの問題に対処しようとする。やがて「ドゥーチェ絶対主義」の昂進や「全体主義化」によって伝統的国制への攻撃が強まると、国制は「二元制」（ドゥーチェと国王）化し、諸勢力が並び立つ「全体主義の消化不良」が進行する。他方、ドゥーチェの圏域では「ドゥーチェ絶対主義」が強まり、ドイツのような「権限のカオス」が生じることになった。こうして、ムッソリーニが前面に出る「個人専制」化と、彼が後景に退く「二元制」化が同時に発生した。ムッソリーニは公的地位に立脚した政府首長独裁を模索し、次いでカリスマ的威信に基づくドゥーチェ独裁へと歩を進め、結局、「二元制」化したドゥーチェ独裁にたどり着いたのである。そして第2次大戦期にムッソリーニの威信が揺らぐと、この仕組みは崩壊に向かうことになる。